

山羊が卵を産んだ

デザイン学科
遠藤拓人

Goat laid eggs.

Department of Design
ENDO Takuto

森や草原の木々や草を眺めていると、一見ランダムのようにありながら、ある規則性を帯びているのがわかる。それは日の光であったり、他の植物との関係性であったり、見えない水や土や風の関係から、自分に適した居場所を探しているのだと思う。

木の葉、幹、それに巻きついた蔦や、その下に群生する草。自然物であるはずのそれらは時としてコンピューターでコピー＆ペーストをしたような反復や、機械的なグラデーションを帯びているようにも見える。

一時期から森に惹かれ、樹海や青森など各地の森の取材を続けてきた。この自然という、アナログの至高のような存在は、むしろデジタルの画材によってその在り方をより抽出できるのではないか、そう考えるようになった。

「デジタル」という新たな画材が登場し数十年が経つ。私は大学院以後「透過原稿ユニットを使用したイラストレーションの制作」の研究を行ってきた。これは、デジタル画材による表現が持つ特有の平滑さ「実にデジタルらしい」「デジタル臭をぬぐいきれない」表現というものを払拭できないかという試みであったが、なぜその必要があったかといえ、この研究を始めた当時（2000年ごろ）、デジタルという画材はしばしば「アナログより劣った画材」と見られ、「アナログの模造品」であり、デジタル特有の不自然さは、絵の価値を落とす要因になっていると考える風潮があったからだ。

しかし時代は変わり、多くの作家がデジタル画材を扱い、メディアにもコンピューターグラフィックスによって作成された画像が溢れる中で、その「デジタルっぽさ」は慣れとともに、人々にとって不自然から自然なものへと変化していった。やがて、デジタルの中の美しさを見出せるまでに変化した。

この作品群は自然の象徴である森をモチーフに、そこに住む少年達と動物達の物語によって構成されている。コピー＆ペーストや幾何形態、グラデーション、パターン、極端な彩度といったデジタル特有の表現を多く使用し制作を行った。これは、これまで避けてきたデジタルらしさ、隠されてきた画材をあえて表に出し、時代の変換を示すひとつの試みである。















